

# 韓国における西田幾多郎

## Kitaro Nishida in South Korea

文学研究科人文学専攻博士前期課程修了

孫 惠 珍

**Hyejin Son**

はじめに

### I. 韓国における西田受容

1. 韓国における西田受容の現状
2. 韓国における受容の傾向性

### II. 韓国における西田幾多郎の理解

1. 西田の歴史哲学
  - (1) 『近代日本の二つの顔－西田哲学』から
  - (2) 李賛洙の『近代日本の二つの顔－西田哲学』に対する論評から
2. 西田と歴史哲学と皇室
  - (1) 西田の歴史哲学と皇室
  - (2) 西田の「一即多」と「国家と国民」
3. 西田の日本文化論と皇室
4. 西田と戦争へのイデオロギー提供をめぐって
  - (1) 世界新秩序の原理
  - (2) 座談会「世界史的立場と日本」

### III. 韓国における西田哲学の意義と課題

1. 韓国における西田の意義
2. 韓国における西田の今日的課題

結び

はじめに

近代日本の代表的な哲学者である西田幾多郎（1870～1945）は、その生涯と思想について多方面から多くの研究が行われ、西田の独創的な哲学の体系は世界的哲学としてその位置が示されつつある。本稿の筆者が西田にはじめて触れたのは『善の研究』である。西田は、彼の処女作『善の研究』にお

いて、「此書を特に『善の研究』と名づけた訳は、哲学的研究が其前半を占め居るにも拘らず、人生の問題が中心であり、終結であると考えた故である」<sup>1</sup>と語っている。

筆者が受けた西田の第一印象は、人間の生き方を追求する求道者のような姿であり、思索また思索を重ねていく哲学者の姿であった。難解な西田の哲学用語や哲学に少しずつ馴染みながら、西田の研究論文や書簡や日記などに接していく中、人間的魅力のあふれる一人の真面目な人としての西田幾多郎もみえてきた。これが私のなかでの西田像ともいえるだろう。しかし、韓国の文献を読むにつれて浮かび上がってきた西田像は、筆者のもつ西田像とは異なる観点からのものが多かった。

本稿において筆者は、まず、韓国における西田の受容の現状を概観することにした。そして、西田受容の現状からその傾向性を把握した後、論点になる部分を取りあげながら、韓国における西田理解について考察することにした。できる限り、西田の本来の意図とはいかなるものであったのかという点も念頭においてみることにした。

西田の哲学は「日本の哲学の座標軸」<sup>2</sup>ともいわれている。韓国人にとって、西田の哲学・思想を理解することは、日本の精神の奥にある哲学・思想を理解するための、一つの手がかりになるのである。こうした点を、韓国において西田研究のもつ重要性の一つとして確認しておきたい。

## I. 韓国における西田受容

### 1. 韓国における西田受容の現状

韓国では、日本思想・哲学に対する関心は殆どなかったともいえる。それはたとえば、大学の専攻に、日本語日本文学科や日本語教育科、日本学科は存在しているが、独立した日本哲学の専攻は存在していないことからいえよう。こうした韓国の実状のなかでの、西田幾多郎の受容のことになる故に、西田幾多郎がまだ十分に認識されていないことが、推測できるのではなからうか。

まず、韓国における西田に関する文献を検討してみることにしよう。

西田の著作のなか、韓国語で翻訳して発刊されているものは、わずか一冊である。また、西田に関する研究書は、日本の研究者の研究書を韓国語で翻訳した書籍が一冊、韓国人による研究書が一冊、計二冊のみである。このように、筆者の調べた限りでは、書籍の全体にわたって西田幾多郎を主題とする韓国語で発刊されている書籍は、この三冊しか存在していないことが把握できた。

西田の著作のなか、韓国語で翻訳されている唯一のものは、『善の研究』である。『善の研究』の最初の発刊は、崔絃（チェ・ヒョン：최현）の翻訳によるものであって、1963年に創元社から、1970年に三信書籍から出版された。その後、1983年に、金常善（キム・サンソン：김상선）の翻訳によって、ミョンムンダンから発刊された。そして1990年に、徐石演（ソ・ソクヨン：서석연）の翻訳によ

<sup>1</sup> 西田幾多郎「善の研究」『西田幾多郎全集 第一巻』（岩波書店、1978.10.）、pp.4～5.

<sup>2</sup> 中村雄二郎『西田幾多郎 I』（岩波書店、2001.1.）p.209.

る『善の研究』がボンウ社から発刊された。現在、一般の書店でも入手可能なものとなっているのは、徐による『善の研究』である。

徐は「この本に初めて接した時は、若干難しくて拒否感まで感じたが、繰り返し読んでいくと、手放せない魅力とともに全身に言葉では表現できない大きな感動に襲われた」と、『善の研究』に対する感想とともに、その翻訳することになったきっかけを述べている<sup>3</sup>。

西田に関する研究書は、2003年に、小坂国継の『西田幾多郎の思想』<sup>4</sup>が、『絶対無の見性哲学—西田幾多郎の思想』<sup>5</sup>という題名で発刊されている。翻訳は、深寂（シンジョク：심적）<sup>6</sup>による。

深寂は「訳者の話」において、「近代日本の代表的な哲学者と言える西田幾多郎の生涯と、彼の哲学世界を通して、日本人の心性や日本的な思惟方式を知ることのできるであろうが、西田はとくに、東洋の仏教哲学を中心として西洋の哲学の概念を導入し、西洋哲学と比較しながら彼の哲学的世界を構築したゆえに、東洋思想の優秀性を理解するのに役に立つと思われる」<sup>7</sup>と述べている。

次に、韓国人による韓国語で書かれた西田研究書として、『近代日本の二つの顔—西田哲学』<sup>8</sup>がある。本書は、2000年、慶熙大学の教授である許祐盛（ホ・ウソン：허우성）が編纂したものである。この『近代日本の二つの顔—西田哲学』は、557ページからなり、3部8章の構成である。

著者の許は、「筆者が取った方法は、西田哲学に三つの発展段階を想定して、その段階のなか、ほぼ同じ時期に発表された一連の論文を集中的に読んで整理する式であった」<sup>9</sup>と述べている。そして、この研究書を『近代日本の二つの顔—西田哲学』と名づけた理由について、「少なくとも、わが民族の歴史的記憶に押さえつけられて、又は単純な民族感情を持ってこの本を書きたくはなかったため、筆者はこの本の題名として『西田哲学批判』の代わりに、ただ『西田哲学』とした」<sup>10</sup>と述べている。さらに、「二つの顔」の意味については、「西田哲学は、こうして我々に少なくとも二つの顔で近づいてくる。一つの顔には生命の躍動がみられ、もう一つの顔には帝国主義の日本が見られる。歴史哲学に失望したとしても、躍動する生命の顔を見無視してはいけなく、生命哲学に陶醉して帝国主義の日本の顔を忘却してもいけない」<sup>11</sup>と説明している。また、「西田哲学に対する研究と翻訳が、ある程度進

<sup>3</sup> 「この本を読む方へ」から。p.7.

<sup>4</sup> 講談社、2002年5月発刊。「本書は、NHKラジオ第2放送の番組『こころをよむ』（2000年10月～2001年3月放送）で放送されたラジオテキスト『西田幾多郎の思想—二十一世紀をどう生きるか』を底本としました」と小坂国継の『西田幾多郎の思想』（2002年）に書かれてある。

<sup>5</sup> 出版社は、藏経閣になる。2003年6月発刊。『絶対無の見性哲学—西田幾多郎の思想』は、『절대무의 견성철학—니시다키타로의 사상』を和訳したものである。

<sup>6</sup> 本名は、金容官（キム・ヨンクァン：김용관）。1980年、出家。1990年、日本に留学。『絶対無の見性哲学—西田幾多郎の思想』が発刊される2003年当時には、日本で韓日禅文化比較研究者として活動中であった。

<sup>7</sup> 深寂『絶対無の見性哲学—西田幾多郎の思想』（藏経閣、2003.）p.9. 和訳は筆者。

<sup>8</sup> 『近代日本の二つの顔—西田哲学』は、『근대 일본의 두 얼굴—니시다 철학』の和訳である。

<sup>9</sup> 許祐盛『近代日本の二つの顔—西田哲学』（ソウル；文学と知性社、2000.5.）p.15. 和訳は筆者。

<sup>10</sup> 同上、p.11.

<sup>11</sup> 許祐盛『近代日本の二つの顔—西田哲学』（ソウル；文学と知性社、2000.5.）p.6. 和訳は筆者。

行した後は、異なる方式で書きたい」<sup>12</sup>と新しい西田研究への意思を表明している。この『近代日本の二つの顔－西田哲学』は、韓国では最初であり、唯一の西田研究書となる。

ところで、許は、1988年のハワイ大学での哲学博士学位<sup>13</sup>の論文を、西田哲学をテーマにして執筆している。「A Critical Exposition of Nishida's Philosophy (西田哲学の批判的解明)」という題名の論文である。この論文が、韓国人による最初の西田研究論文になるのではなかろうか。そうした意味で、許は、韓国の西田研究の先駆けともいえよう。その意味では、許の研究は、今後の、韓国における西田研究の一つの出発点になるのではなかろうか。

なお、その他に、韓国における西田幾多郎について触れている書籍は、具見書(ク・キョンソ:구견서)の『日本民族主義史』<sup>14</sup>と『日本知識人の思想』<sup>15</sup>とが挙げられる。『日本民族主義史』における西田について言及している箇所は、韓国における西田像をつかむ一つの資料になると思われる。この『日本民族主義史』は、日本学という分野からの研究書であるが、日本の明治から現在までの政治家、経済人、知識人のなかから民族主義者を取り上げ、日本の民族主義とその意義について論じている。そして『日本知識人の思想』では、福沢諭吉、中江兆民、夏目漱石、津田左右吉、三島由紀夫、大江健三郎の思想とともに、京都学派と新京都学派の思想を論じるなかで、西田について言及している。この書籍においては、京都学派と新京都学派の思想の役割について、政治、社会、文化など日本のあらゆる分野に影響を与えていると評価しており、そのなかで、京都学派と新京都学派の源流になる人が西田幾多郎であると述べている。

次は、本稿筆者が確認できた西田に関する研究論文をみることにしよう。

韓国において西田哲学をテーマとした研究論文は、学術誌などに載せられているものは五本あったが、全部が許による論文であった。これらの論文の題名は、「西田哲学のバーダーンタ哲学に対する批判(1989年)」<sup>16</sup>、「西田哲学の攘夷的性格(1993年)」<sup>17</sup>、「西田と西洋哲学－時間観を中心に(1996年)」<sup>18</sup>、「真理は玄海灘<sup>19</sup>を渡れない－西田哲学を中心に(1999年)」<sup>20</sup>、「記憶間の戦争：ナショナルリズムの衝突(2006年)」<sup>21</sup>である。

また、その他の研究者による西田に関連した論文は、2004年に出されている金成珉(キム・ソンミン:김성민)の修士論文がある。金の研究は、韓国の哲学者である朴鐘鴻(パク・ジョンホン:박종홍)と西田幾多郎が、ヘーゲルの弁証法をそれぞれどういうふうを受容しているのかを比較した論文であ

<sup>12</sup> 同上p.11.

<sup>13</sup> 仏教および比較哲学分野。

<sup>14</sup> 具見書『日本民族主義史』(ソウル;ノンヒョン,2004.8.)。『日本民族主義史』は『일본민족주의사』の和訳。

<sup>15</sup> 具見書『日本知識人の思想』(現代美学社,2001.10)。『日本知識人思想』『일본지식인의 사상』の和訳。

<sup>16</sup> 『インド哲学 第一巻』(インド哲学会,1989.1.) pp.259~283.

<sup>17</sup> 『日本思想 第一号』(韓国日本思想史学会,1993.3.) pp.195~215.

<sup>18</sup> 『東洋学 26号』(壇国大学校付設東洋学研究所,1996.10.) pp.303~324.

<sup>19</sup> 日本では玄界灘、対馬海峡といわれる。

<sup>20</sup> 『哲学と現実 43号』(哲学文化研究所,1999.12) pp.223~239.

る。題名は、「朴鐘鴻と西田幾多郎のヘーゲル弁証法の変容に対する比較研究」<sup>22</sup>である。

その他、美術の作品世界への西田哲学の影響を扱う修士論文が三本あるが、そのうちの二本は、在日画家の李禹煥（イ・ウファン：이우환）<sup>23</sup>の作品世界と、西田哲学との関係についての論文である。一つは、慶北大学校に在学した波多野慎二の「李禹煥の作品に現われた精神性に関する研究（1994年）」<sup>24</sup>という修士論文であり、もう一つは、徐智暎（ソ・ジョン：서지영）の「李禹煥の作品に現われた『出会い』理論に関する研究（2002年）」<sup>25</sup>という修士論文である。残りの美術関連の論文は、閔キョンチェ（ミン・キョンチェ：민경채）の「韓国モノクロム絵画の様式的特性に関する研究：ミニマルアート（2003年）」<sup>26</sup>であって、韓国美術系のモノクロム（monochrome）絵画の研究のなか、日本のモノ（物）派と西田哲学との関連性について論じている修士論文である。

以上のように、筆者が調べた限り、西田を主題にした論文の殆どは、修士論文であって、韓国での西田を主題にしての研究の博士論文は、許の論文以外には存在していないことがわかった。

なおその他に、京都学派の学者や哲学をテーマとした論文のなか、西田との関係性について言及している「神、人間、そして、空：カール・ラーナー（Karl Rahner）と西谷啓治との比較研究（1997年）」<sup>27</sup>という、李賛洙（イ・チャンス：이찬수）の博士論文があった。また京都学派の学者や哲学をテーマとした論文のなかで、西田について言及している修士論文は、崔ヒョンミン（チェ・ヒョンミン：최현민）の「久松眞一の禅思想（1994年）」<sup>28</sup>と呉ムンボン（オ・ムンボン：오문범）の「仏教の空に対するケノシス神学の照明（1996年）」<sup>29</sup>がある。

以上から把握できたことは、博士論文としては、1988年、許のハワイ大学での博士論文とともに、1997年、西田哲学自体をテーマにした論文ではないが、李の韓国の西江大学での博士論文、あわせて二本しかないことである。韓国における西田研究の論文は、一年に一本にも至らない程度のペースであり、数少ないことから、韓国の西田研究が、まだ本格的には行われていないことが明らかである。

こうした韓国における西田受容の現状への概観から、韓日両国の長い交流の歴史に比べて、西田

---

21 尹（ユン）サンイン、朴（パク）ギョテ編著『日本の発明と近代』（イサン、2006.7.）pp.17～54.

22 成均館大学校大学院、東アジア学共同課程修士学位論文、2004.12.

23 李禹煥は1936年、韓国慶尚南道で生れた。1956年ソウル大学校美術科を中退して日本に渡った。1961年、日本大学哲学科卒業。1973年から1990年まで多摩美術大学教授。李の作品製作と理論活動は、1970年を前後して日本で形成されたモノ派と密接に関連されていて、モノ派の成立に実質的に貢献したと言われている。李の美術論は基本的に世界を対象化する表象作用への批判から始まるという。李にとって、芸術作品は「つくる」という創造概念であるよりは、ありのままの世界と「出会い」を可能にすることによって世界との一体感を自覚させる構造であるという。

24 慶北大学校、美術学科修士学位論文、1994.2.

25 京畿大学校、修士学位論文、2002.

26 弘益大学校 教育大学院、修士学位論文、2003.

27 西江大学校大学院 宗教学 神学専攻文学博士論文学位。1997.

28 西江大学校大学院 宗教学専攻修士学位。1994.

29 韓神大学校神学大学院 組織神学専攻修士学位。1996.

研究は、その歴史がまだ浅いということがわかった。また許を除いては、西田専門の研究者の名前は挙げられないのが、韓国の西田研究の現状である。韓国において西田研究と受容は、歴史的にも量的にも始まったばかりである。そして研究以前の問題として、韓国人一般に西田幾多郎という名前すら充分に知られていないということも看過してはいけないことであろう。

## 2. 韓国における受容の傾向性

ここでは、上述した韓国においての西田受容の現状への概観から、西田受容の傾向性を考察してみることとする。

なお最初に、韓国においての西田受容の傾向性を述べる時、まず、韓国唯一の研究書である許祐盛の『近代日本の二つの顔－西田哲学』を、主な資料として用いることに言及しておきたい。この研究書が西田研究の貴重な資料として用いられているのは、2004年に出された金成珉の論文の「朴鐘鴻と西田幾多郎のヘーゲル弁証法の変容に対する比較研究」<sup>30</sup>からも見える。金の論文から、小坂国継の研究書の韓国語版である『絶対無の見性哲学－西田幾多郎の思想』とともに、許の『近代日本の二つの顔－西田哲学』を研究の資料として用いていることが確認できた。こうしたことから許の研究は先行研究として、韓国の西田研究の方向づけに重要な立場にあることがわかる。

『近代日本の二つの顔－西田哲学』についての論評を、李賛洙は『仏教評論』という雑誌において<sup>31</sup>、次のように述べている。「西田幾多郎（1870～1945）は、近代の日本哲学の代表者と呼ばれてもふさわしい人である。しかしながら残念なことに、今まで我々の国においては、研究が皆無とも言えるほどであった。民族主義的な反日感情も一役かっただと思われるが、西田哲学自体がとても難解であったことも重要因であるだろう。否、もしかしたら『近代日本哲学』というものを、どれほど真摯に考えてみたのが疑われるところである。このような状況のなか、決して簡単ではない西田哲学を、体系的でありながらも、膨大な量の西田研究を整理しぬいたことだけでも、許祐盛教授の本著作は、国内の哲学界や政治思想界において、これからもずっと読み続けられる作品になるに間違いはない。さらに、単純な民族感情を超越して、西田の言語を通じて東洋・西洋の哲学の問題点まで見せてくれたことは、著者の哲学的能力にもよるであろう」と。そして、「この本の価値は堅固である」と高く評価しながら、「今やっと、我々の国においても、本格的に近代日本哲学に対する議論ができるようになったことは大変喜ばしい」と述べている。

さらに、許の『近代日本の二つの顔－西田哲学』についての書評として、宋フィチル（ソン・フィチル：송희철）<sup>32</sup>は、こう述べている<sup>33</sup>。「我々の国には、未だに根強い反日感情があり、知識人さえ

<sup>30</sup> 成均館大学校大学院、東アジア学共同課程修士学位論文、2004.12.

<sup>31</sup> 『仏教評論』（現代仏教メディアセンター、2001年、春号、第六号）pp. 382～393.

<sup>32</sup> 慶北大学校、倫理教育科教授。

<sup>33</sup> 『当代批評』（考えの木、2000年、秋号、第12号）、p.431.

日本に『思想なんかあるか』と反問するほどの日本を無視する風土である故に、長い間、孤軍奮闘して編して出した許教授のこの本が、我々の国の日本思想研究に、否、東洋哲学研究に新しい地平を開く起爆剤になってほしい」と。

ここに挙げた李と宋の話のように、許の『近代日本の二つの顔－西田哲学』は、韓日の特殊な関係のなか、日本哲学・思想研究に繋がる西田研究書として出されたこと自体が高く評価できる。そして、これから批評と議論の対象になることも考えられることであろう。

ところで、『近代日本の二つの顔－西田哲学』において許は、西田の後期哲学を歴史・政治哲学であると見ていて、西田哲学の形成の背景について、次のように述べている。

西田哲学は、その生涯とともに議論されなければならない。彼の哲学はその生涯から与えられたものを資料にして、そこから反省と思惟を加えて形成されたからである。彼の生涯を論じる時には、近代日本の歴史もさらに考慮しなければならない。彼が内的生命と歴史的生命を追及している間、彼の生涯は明治・大正・昭和へつづく近代日本の歴史的環境と密接に連関づけられていたからである。西田哲学の形成に重要な役割となったものとして、初めは主として個人的悲劇が、次は主として衝撃と激動の時期を生きていた日本人全体が直面していた歴史的運命と、これに対する日本人の集団的対応があった<sup>34</sup>。

以上のように許は、西田の哲学が、初めは個人的悲劇に、歴史哲学の時代には日本人が直面した「歴史的運命」に対する「集団的対応」という時代背景のなか形成されたと論じている。つまり、西田の歴史哲学は、そのような戦争へ総動員された日本の歴史的背景のもとで形成されたものであって、戦争に西田哲学が関わってしまったとみるのが、許の大きい論点の一つになっている。

その他、西田理解と受容の内容がみえる文献として挙げられるのは、具見書の『日本民族主義史』と『日本知識人の思想』である。これらの文献を概観してみると、西田の哲学が、独創性をもつ世界的な哲学であることは認めながら、後期の西田と西田哲学に対しては、戦争と結び付けて、哲学的ナショナリズムであると断言し、批判している。さらに、京都学派と新京都学派の一部が、戦争擁護の発言をしたことに関連して、西田哲学を批判的にする傾向性をもっている。

西田に対する批判といえ、擁護する側の声と交わりながら、当時から現在に至るまで絶えず行われてきた。本来、哲学者なら誰でも、自分自身の哲学的論理への批判の矢は避けるのはできないことであるが、それにしても、西田批判の場合は、論争の焦点の一つが、西田哲学の近代日本の帝国主義の侵略戦争へのイデオロギー提供にあることが、大きい特徴であろう。西田と戦争との関わりについての西田批判は、特に日本国内の研究のなかにも厳しいものがあったが、西田の哲学を高く評価しつつある海外の研究、とくにアメリカやヨーロッパの研究においても、論じられているのが事実である。

---

<sup>34</sup> 許祐盛『近代日本の二つの顔－西田哲学』（ソウル；文学と知性社、2000.5.）p.21. 和訳は筆者。

それは、アメリカやヨーロッパの西田研究の接近方式が、歴史的・政治的立場からのアプローチを優先する傾向をもっていたのも一つの原因であるとみられる。

同様に、現在韓国における西田研究の場合も、西田と戦争との関わりについての注目が大きい傾向の一つであることが、先行研究から把握できた。こうした西田と戦争との関わりについての論争は、近代化という課題をもって日本が戦争に全力を尽くした時代を生きていた西田においては運命ともいえるものであったし、西田研究者ならば避けることのできない、一つの課題になるだろう。

しかし、その西田と戦争との関わりについての論争が、数少ない研究のなかでの話になると、韓日の歴史的事実が背景になって、西田の全体像に偏ったイメージが植え付けられる可能性も十分考えられる。西田哲学・思想の本来の姿を見逃す恐れをもつことも予測できる。

本来、哲学というものは、時間や場所によって限定されないものであり、真理と普遍性を求める学問であるところに、その性質があるといえる。こうした哲学の本来のあり方を勘案するとき、西田が戦争と関連付けられて、「西田の歴史哲学は哲学的ナショナリズムである」、「西田の文化観は文化的民族主義である」といわれることは、西田の哲学・思想における普遍性が疑われる問題にも係わるのではなからうか。

## II. 韓国における西田幾多郎の理解

ここでは、西田と戦争との関わりをめぐっての、韓国における西田理解を考察することにした。

### 1. 西田の歴史哲学

#### (1) 『近代日本の二つの顔－西田哲学』から

許は、西田が重要な二つの哲学を追求したことを西田の全集を通して確認し、その一つは「内的生命哲学」であって、もう一つは「歴史哲学」であるという。そして、「内的生命哲学」は宗教的救済論的であって、「歴史哲学」は歴史・政治的であると論じながら、「彼の哲学が、独創性や普遍性のみならず、ナショナリティ<sup>35</sup>まで見せている」<sup>36</sup>と述べている。さらに許は、西田哲学が「ナショナリティ」という「非普遍性」の論理をもつ故に、「東アジア近代史の全体の情熱と破滅に深く関連づけられた」<sup>37</sup>とも述べ、その意味からも西田の哲学は世界へ繋がると、批判的に西田を論じている。しかしながら許は、西田の「内的生命哲学」も「歴史哲学」も、本質的には存在論であると指摘し、二つの生命に一つの論理を付与し、その論理を追求した哲学者としての西田に対して、「日本の代表にとどまらず、

<sup>35</sup> 韓国語では「국적성」と書いていて、これを漢字で表記する場合、国籍性になるのであるが、国籍性という言葉は日本語の表記としては正しくないということで、ナショナリティと訳した。

<sup>36</sup> 許祐盛『近代日本の二つの顔－西田哲学』（ソウル；文学と知性社、2000.5.）pp.6～7. 和訳は筆者。

<sup>37</sup> 許祐盛『近代日本の二つの顔－西田哲学』（ソウル；文学と知性社、2000.5.）p.7.



世界の一流の哲学者だ」<sup>38</sup>と高く評価する。

そして、その存在論の核心には「自覚の形式」があると、次のように述べている。

「自己が自己において自己をみる」という自覚の形式、これに対する完全な理解は1929～1930年頃、成熟した絶対無の自覚の哲学において成している。自覚の形式が適用される限り、いかなる事象でも完全な実在性を得ることになる。この形式の芽は、純粹経験、芸術の創造行為のようなものにあつたが、ついに瞬間的な自覚の一行為に至ることになり、歴史の一時代、国家、天皇などの概念にまで適用される<sup>39</sup>。

許によると、西田の「自覚の形式」の形成・適用において、1904年頃には「内的生命哲学」が最初形成され、1929～1930年の時点で成熟の頂点に至り「絶対無の自覚の哲学」を成し、また、1931～1932年頃の論文からは「歴史哲学」が政治的概念と結合して、自覚の形式も歴史の一時代、国家、天皇などの概念にまで適用されたという。こうした1931～1932年頃の、西田の初期の「内的生命哲学」から後期の「歴史哲学」への移行を「西田が、内的生命の追求から得た自覚の形式を、歴史的生命の活動にまで、そして時代や国家などの非意識的現象にまで拡大して適応するようになったことを、筆者は、転回turnと呼んでみた」<sup>40</sup>と、意味付けるのである。

さらに、「転回とともに彼は、自覚の一行為の絶対性と自己限定のかわりに、歴史的一時代の絶対性と自己限定を主張することになった。彼は、さらに国体や国家などの政治的概念を議論した」<sup>41</sup>と述べ、「西田の政治哲学は、彼の歴史哲学から出る」<sup>42</sup>と論じている。

ここで、果たして西田哲学を「内的生命哲学」と「歴史哲学」という、性格の異なる二つの哲学として分離すること自体が成り立ちうるかどうか、という問題意識が提起できる。

李贇洙は、『仏教評論』<sup>43</sup>という雑誌のなかで、『近代日本の二つの顔－西田哲学』に対する論評を発表し、『近代日本の二つの顔－西田哲学』を高く評価しながら、いくつかの問題意識を提起するなか、許による西田の「歴史哲学」をめぐって異見を示しているのである。

---

<sup>38</sup> 同上p.7.

<sup>39</sup> 同上p.112.

<sup>40</sup> 同上p.112.

<sup>41</sup> 同上p.113.

<sup>42</sup> 同上p.425.

<sup>43</sup> 李贇洙『仏教評論』（現代仏教メディアセンター、2001年、春号、第六号）。pp.382～393.

## (2) 李贄洙の『近代日本の二つの顔－西田哲学』に対する論評から

李贄洙の論評によると、『近代日本の二つの顔－西田哲学』において許は、西田哲学を「歴史・政治的側面に焦点をあわせて文章を展開していく傾向」をもっていると、次のように指摘している。

西谷啓治は、西田から始まった京都学派の実質的代表者に値する人として、西田から「自分よりもっと自分に近い人」という評価をもらった一番弟子である。このような西谷が西田の哲学をおそらく宗教哲学的視点から究明する本を出している。しかし、あいにくなことに、著者は、西谷のこのような視点を批判している。著者によると、西谷は、西田の歴史哲学から斥けた宗教哲学的な面だけに接近するという無理解を示している。そして西谷とは逆に、西田哲学を宗教的側面よりは歴史・政治的側面に焦点をあわせて文章を展開していく傾向をみせる。しかし、ここには問題があるのではなかろうか<sup>44</sup>。

こうした李の許に対する批評は、次のような許の議論に対してのものである。

西田の歴史哲学に対する、西谷の無理解ないし無視は、一過性の解析の失敗程度として単純に取り扱うべきものではない。終戦以降の西田の歴史哲学が、批判されて無視されている現実を代弁していると言える。世人の関心は、大体に彼の宗教哲学に集中されていて、彼の歴史哲学は殆ど無視されてしまった<sup>45</sup>。

つまり、西谷啓治が西田哲学を宗教的・救済論的な脈絡に傾けて理解し、歴史哲学の脈絡を無視して解析したのは西谷の失敗であるとみる許に対して、李は、許の西田理解には問題があると述べながら、西田の思想を宗教的に把握した西谷の理解が間違っただとしても、歴史・政治哲学中心に把握した許の接近法も、完全なものとは言えないというのである。さらに、李は、天皇・国体などを強調する歴史・政治哲学を中心とした許の西田理解は、読者にとっては西田哲学を総体的にみることを不可能にする恐れがあることを明らかにしている。

後期の西田の使う言葉に天皇・国体などが良く出ているのは、確かなことである。しかし、それにしても歴史哲学・政治哲学的であると断定するには無理があるのではないか。西田の『善の研究』から最後の完成論文である『場所的論理と宗教的世界観』に至るまで総体的に見るとき、西田の哲学には、宗教哲学的性質を持つと思われるほどの一貫したものが見えることも確かである。しかしむしろ、筆者の西田理解からいえば、西田の哲学は「生」に関する、「人生」に関する哲学であると定義して見るのも、西田により近づく理解になると思われる。

西田の日記には、こう綴られている。「学問は、畢竟lifeの為なり、lifeが第一等の事なり、lifeなき

<sup>44</sup> 李贄洙『仏教評論』（現代仏教メディアセンター、2001年、春号、第六号）。pp. 385.

<sup>45</sup> 許祐盛『近代日本の二つの顔－西田哲学』（ソウル；文学と知性社、2000.5.）p.416. 和訳は筆者。

学問は無用なり。急いで書物よむべからず」<sup>46</sup>と。生涯にかけて学問を何より大事にし、学問を中心とした人生を歩んできた西田にとって、学問よりも、もっと肝心なものがlifeであったことがわかる。西田の思索のなかには、常にlifeというものがあったのに違いない。これが、筆者の西田理解の一つの観点であり、本稿で、この一観点も韓国における西田像に加えることを試してみた。

## 2. 西田の歴史哲学と皇室

### (1) 西田の歴史哲学と皇室

ここでは、韓国における西田理解のなかで、「西田の歴史哲学と皇室との関係」について許の理解を中心にして考察してみることにする。許は、次のように論じている。

日本が戦争期に突入すると、祖国の日本の運命に深く共感して歴史哲学を展開していった。西田は、歴史的生命の具現を追及しようとする歴史哲学において、天皇と国体、そして戦争を擁護することによって、日本国民のナショナリズムを最も露骨に現した。彼は後期のいろいろな歴史的・政治的論文を通じて、日本の国民はいかなる環境においても創造的応戦をしなければならないと力説し、1943年、「歴史哲学」をテーマとして昭和天皇に御進講をもした<sup>47</sup>。

この内容と一脈相通じる文章として、許は彼の論文「記憶間の戦争—ナショナリズムの衝突」のなかで「歴史哲学の時期の西田は、天皇を敬愛し、天皇と国体をすべて哲学的に擁護するようになる」<sup>48</sup>と述べている。具見書の『日本知識人の思想』においても、「多数の国民は、一の国家に取り入れられるという哲学的解析を通して、当時の日本国家と天皇の存在を認めた」<sup>49</sup>と述べている。つまり、許と具は、西田が歴史・政治的哲学をもって天皇と国体、そして戦争を擁護することになり、西田の歴史哲学は、哲学的ナショナリズムまで提示したと西田を評価しているのである。

さらに、許は、西田の哲学的ナショナリズムは「皇室を絶対化」することにまで至ったとして、こう述べている。「このような方式で歴史と時代は神聖化され、結局、絶対無の自覚および内的生命が享受することができた最頂上に到達することになる。そして時代をはじめ民族・国家・天皇のような歴史的・政治的概念が絶対化される。ここに、西田の歴史・政治哲学が誕生する」<sup>50</sup>と。そして「彼の国家論は、天皇中心の宗教的国家論と言える」<sup>51</sup>と、西田の「天皇中心の宗教的国家論」は「祭政一致」にまで至るものであると論じている。

<sup>46</sup> 西田幾多郎『西田幾多郎全集 第十七巻』(岩波書店、1980.2.) p.74. 1902年(明治35年)2月24日の日記。

<sup>47</sup> 許祐盛『近代日本の二つの顔—西田哲学』(ソウル; 文学と知性社、2000.5.) pp.8~9. 和訳は筆者。

<sup>48</sup> 許祐盛「記憶間の戦争—ナショナリズムの衝突」『日本の発明と近代』(ソウル; イサン、2006.7.) pp.26~27. 和訳は筆者。

<sup>49</sup> 具見書『日本知識人の思想』(現代美学社、2001.10.) p.215. 和訳は筆者。

<sup>50</sup> 許祐盛『近代日本の二つの顔—西田哲学』(ソウル; 文学と知性社、2000.5.) p.108. 和訳は筆者。

<sup>51</sup> 同上p.436.

ところで、西田の孫である上田久は、西田の皇室に対する思いがよく窺えるような話を、こう綴る。「祖父は皇室に対しては明治人らしく、日本民族の総本家というような意味で親愛の情を抱いて居り、政治を離れた文化のパトロンというような存在を考えていたようだが、私どもには、天皇個人は普通の人間で、自由を持たない可哀相な存在であるといい、中学校時代軍国主義的な教育を受けていた私たちを戸惑わせた」<sup>52</sup>と。

こうした一話からみても、西田は確かに皇室に対して尊敬の念を抱いていたに違いない。それとともに天皇個人は普通の人間であることも考えていたようである。西田晩年の論文には、皇室を中心とした世界創造、皇室のあり方を多く論じているのも確かであるが、しかしそれが「西田の国家論」を「宗教的国家論」とであると断定するには無理があるのではなかろうか。

## (2) 西田の「一即多」と「国家と国民」

許は、西田の歴史哲学のなかでの論理として「一即多」、「絶対矛盾的自己同一」をとりあげ、「国家（或は、皇室）と国民の関係」にどのように作用しているのかについて、次のように述べている。

論理の要求にしたがって披露した西田の様々な政治的主張とは別に、日本の実際の歴史を見ると、我々は、個物的一としての国民が、全体的一としての国家と、絶対矛盾的自己同一という関係を維持することができたか、それとも国家が一方的に、国民個人々人を従属と支配の対象へ転落させてしまったか、という質問を投げかけざるを得ない。天皇と臣民、国家と国民の間に、真に対等な関係が成立したとすると、西田は天皇と国家に対して必ずしも随順への道だけではなく、抵抗と反発、そして批判への道も開けておかなければならなかったと思われる。<sup>53</sup>

上記のように、許は、西田の論理のなかで問題になるのは「国家と国民」との関係であって、その関係は支配と被支配の関係になり、相互否定と対等の関係にはならないと述べている。そして、結局西田は、哲学の論理的力で、国家が一方的に国民を従属し支配する関係に転落することを支持したと批判する。許は西田が、「西洋哲学書を深く読みながら、彼が西洋の代表論理とみなされた『一之多』という論理を批判して、『一即多』という生命論理を創案した」<sup>54</sup>と述べながら、「一即多」をもって「一之多」の論理に挑戦したが、結局、西洋の論理の「一之多」の論理へ転落することになったという。「一即多」の論理は帝国主義論理に陥り、暴力的なものへ転落してしまったので、西田の「一即多」の論理は失敗であると論じている。そして、許は、「強力な物理力を備えた天皇と国体の自己限定が弱者の他者性を剥奪することができるという点、その点を西田は無視した」<sup>55</sup>と述べながら、天皇制の

<sup>52</sup> 上田久『続祖父西田幾多郎』（南窓社、1983.1.）p.48.

<sup>53</sup> 許祐盛『近代日本の二つの顔－西田哲学』（ソウル；文学と知性社、2000.5.）pp.427～428. 和訳は筆者。

<sup>54</sup> 同上pp.7～8.

<sup>55</sup> 同上p.469.

国家体制による暴力は、「二つの方向へ進んでいた。一つは、日本国民であって、もう一つは、東アジアのほかの民族である」<sup>56</sup>と述べている。つまり、天皇制という国家体制による暴力に、西田の論理が作用してしまったと述べ、西田を批判している。

### 3. 西田の日本文化論と皇室

ここでは、韓国における西田の文化論と皇室との関係についての理解を考察してみることにする。

具見書は『日本民族主義史』において、「西田の日本文化論は、日本文化優越主義の発露にすぎない偏狭な文化論と言えるが、彼の日本文化観は戦前において天皇文化観を創出して、他の一方には、戦後の日本文化論にも社会にも大きく影響を与えた」<sup>57</sup>と述べている。

つまり、具は、西田が皇室を中心とした日本国家が歴史的世界を成して世界中心になるとみていて、そうした西田の日本文化論は、戦前には天皇文化観を創出し、戦後には社会に多大な影響を与えながら、弟子たちの活躍によって天皇文化へ発展するようになったと見ているのである。

さらに、具は、『日本知識人の思想』においても、西田が、京都学派の先駆者であると述べながら、西田は天皇制と日本文化に対する見解を披瀝し、「自分の哲学的思考によって天皇と日本文化に対する哲学的基盤を提供した」<sup>58</sup>と論じている。

ところで具は、西田の日本文化論の哲学的基盤になる論理が、西田の「一即多」「絶対矛盾的自己同一」であるとみて、このような西田の哲学的論理が、日本文化優越主義、天皇文化論を哲学的に正当化し、ついに民族差別を促進させる役割をしたと論じている。

筆者が見るにも、西田は確かに文化の発展のため日本が中心にならなければならないと、皇室を中心にした日本が世界文化の発展を担っていくことを望んでいたと思われる。しかし西田の本来の意図に戦争や侵略という破壊的なものがあつたかどうかを考えてみると、そうではなく、あくまでも文化と学問の興隆という観点からの日本中心の世界性を西田は主張したとみるほうが、むしろ本来の西田に近いと考えられる。

### 4. 西田と戦争へのイデオロギー提供をめぐって

韓国の西田理解によると、西田が戦争にイデオロギーを提供し、戦争を支持したと批判している。

#### (1) 世界新秩序の原理

許は、西田に対して「彼は西洋帝国主義に対抗するという名分の下、大東亜共栄圏の理念を哲学的

<sup>56</sup> 許祐盛『近代日本の二つの顔－西田哲学』（ソウル；文学と知性社、2000.5.）pp.470～471. 和訳は筆者。

<sup>57</sup> 具見書『日本民族主義史』（ソウル；ノンヒョン、2004.8.）p.110. 和訳は筆者。

<sup>58</sup> 具見書『日本知識人の思想』（現代美学社、2001.10.）p.204. 和訳は筆者。

に支持することによって、二流帝国主義に陥る」<sup>59</sup>と述べている。このような見方は、具見書の『日本知識人の思想』にも、次の①と②のように述べられている。

- ① 西田は、新しい日本の誕生とともに新しい世界を構成した。それはまず、それぞれの国家発展を通して結合する共栄圏を構築して、究極的には共栄圏に結合する世界を連想した。この観点からみると、西田は世界国家の形成を通じた世界平和を構想したと思われる。問題点は、世界国家と日本国家との関係である。当時日本はアジアの統合を、日本を中心として構成して、その延長線上で太平洋戦争をおこした<sup>60</sup>。
- ② その声明とは日本がおこした戦争を正当化するため発表された大東亜共同宣言（1943年）を意味する。国家と国民が一つになって、天皇が日本を統治する唯一の存在であり、皇道は世界の支配原理となり、日本文化は世界文化へ成長すべきものとしてみる西田が、日本主義者だったことは否定できない。特に西田が提示した世界史的世界理念は、日本を中心として世界が一つになることを意味する点で、当時、侵略を通してアジアを統合しようとする軍国主義者の大東亜共栄権構想に利用されるための役に立つイデオロギーとなった<sup>61</sup>。

ここで具は、西田の「世界新秩序の原理」が問題になるのは、世界国家の形成を通じた世界平和を構想するものとしても、日本を中心としたところにあると述べている。さらに、「それはやはり、日本天皇と日本民族を改めて回生しようとする愛国心の発露であったとおもわれるので、彼は民族主義者であって、彼の哲学は民族主義哲学であったと評価することができる」<sup>62</sup>と述べている。

ところで、西田の「世界新秩序の原理」<sup>63</sup>の内容において一番問題になる箇所一つは、「大東亜戦争は、東亜諸民族がかかる世界的使命の遂行せんとする聖戦である」<sup>64</sup>としている一節であり、大東亜戦争を「聖戦」であるとして、戦争を支持したということである。

ところが、上田高昭によると<sup>65</sup>、「世界新秩序の原理」は、西田の書いたものではないとされている。

<sup>59</sup> 許祐盛『近代日本の二つの顔－西田哲学』（ソウル；文学と知性社、2000.5.）p.8. 和訳は筆者。

<sup>60</sup> 具見書『日本知識人の思想』（現代美学社、2001.10.）p.213. 和訳は筆者。

<sup>61</sup> 同上pp.206～207.

<sup>62</sup> 同上p.212.

<sup>63</sup> 小坂国継によると（『西田幾多郎の思想』）「世界新秩序の原理」の経緯はこうである。1943年5月、西田が国策研究会の矢次一夫のもとに依りて執筆した。しかし西田が「時代の底流」にのみこまれる機縁になる。田辺寿利によると、1943年2月、金井章次を介して陸軍からの教への要請に応じ、5月19日、佐藤賢了、永井柳太郎、後藤文夫、下村海南など20人くらいの前で東亜共栄圏の理念について話をした。しかし、話が難しかったので、書いて欲しいという依頼があつて執筆した。軍に見せたところ、もう少し軟らかく書いて欲しいというので、今度は西田に代わって田辺が西田原稿を要約する形で書き直した。当時の首相東条英機は、田辺が要約したものを元にして国政演説をして、議会から永井柳太郎が賛成演説をした。

<sup>64</sup> 「世界新秩序の原理」要旨の一節。「世界新秩序の原理」要旨と解説は、矢次一夫が『新政』1954年1月5日号と15日号に掲載したという。しかし、『新政』は特殊雑誌だったため、一般には知られることがなかったという。河西善治の『京都学派の誕生とシュタイナー－純粹経験から大東亜戦争へ』（論創社、2004.8.）による。pp.410～415.

<sup>65</sup> 上田高昭『西田幾多郎の姿勢－戦争と知識人』（八王子、中央大学出版部、2003.4.）p.168.

「世界新秩序の原理」は、西田本人が執筆したものと、それをもとにして田辺寿利が要約したものと、二つが存在して、実際に「大東亜宣言」のもとになったのは、田辺寿利が書いたものであった。こうした「世界新秩序の原理」をめぐる問題に対しては、日本国内でも、西田を批判する立場と擁護する立場との間に、さまざまな論争が起こっていた。

ところで、当時の西田の書簡から西田本人の意図と心情はいかなるものであったのかをみると、「新聞を見て実にいやになった。私の理念は何も理解せられてゐない。何も入ってゐない。私は表現はとにかく根本の理念の確立を重んじたのである」<sup>66</sup>とも綴り、そして「東条の演説には失望いたしました」<sup>67</sup>とも語る。日記や書簡などは個人的なものであって、考えや心情が素直に表現されている点を勘案すると、「世界新秩序の原理」に書いた「聖戦」などは、西田本人の本来の意図とはかなり離れている。西田の哲学が軍部によって一部をきりとられ、利用されたとも考えられる。

## (2) 座談会「世界史的立場と日本」

ところで、西田が戦争と関連づけられて議論になる歴史的出来事は、京都学派が中心になって行った座談会「世界史的立場と日本」である。これに対して、具は、こう述べている。「世界史の哲学が、太平洋戦争という時局的課題に対しての見解を披瀝したものが『世界史的立場と日本（1943年）』である。これは『世界的立場と日本（1941年）』『東亜共栄圏の倫理性と歴史性（1942年）』『総力戦の哲学（1942年）』など3編の座談会の記録で構成された」<sup>68</sup>と。この三回の座談会には、西田は参加していなかったが、弟子である高坂正顕、西谷啓治、高山岩男とともに、鈴木成高の四人が参加し、内容は、『中央公論』に掲載されている<sup>69</sup>。具は、次のように論じている。

- ① このように京都学派は世界史の哲学に共通点を持っている反面、彼らの世界観は日本を中心とする東アジアの秩序の確立とともに、世界的秩序を念頭においていた。彼らは日本のアジア侵略を正当化するために、歪曲された民族観と文化観を提示した。とくに、アジアを侵略した西欧と戦争をするのであると偽装して、アジア民族を解放させるための聖戦であり、英米との戦争に対してヨーロッパを開放させるための聖戦であると示しながら、日本が起こした戦争を総体的に皇戦と規定した。このような視点からみると、京都学派は銃や刀をもって戦争をしていなかったが、頭と思想で熾烈な生存競争と民族戦争を優秀に遂行した戦士だったとみるのは誤判であろうか。それが妥当であるとしたら、京都学派の学風は主観的であって歪曲された国粹主義的学風にすぎないといえる<sup>70</sup>。
- ② このように京都学派第二世代は思想研究を、学問的發展と未来志向的思索よりは、国家のため

<sup>66</sup> 『西田幾多郎全集第19巻』（岩波書店、1979.9）1783、p.224.

<sup>67</sup> 同上1784、p.223.

<sup>68</sup> 具見書『日本知識人の思想』（現代美学社、2001.10.）p.223. 和訳は筆者。

<sup>69</sup> この段落は上田高昭による。『西田幾多郎の姿勢—戦争と知識人』（八王子、中央大学出版部、2003.4.）p.117.

<sup>70</sup> 具見書『日本知識人の思想』（現代美学社、2001.10.）p.224. 和訳は筆者。

に国粹主義的思想を創出して権力服従的な姿勢としての役割をにない、また、国家の思想的侍女として活動したと言える。京都学派は世界史哲学派とも言われる。彼らは、鈴木成高を除いてみな西田の弟子であり、田辺元の弟子であった<sup>71</sup>。

上記のように具は、西田の弟子たちによって構成された京都学派の「世界史の哲学」は、座談会「世界的立場と日本」を通じて、日本のアジア侵略を正当化し、歪曲した民族観と文化観を提示することによって、思想をもって戦争を遂行したと論じている。さらに、京都学派の国粹主義的学風は、学生、知識人などにも広範囲に影響を与えながら、学問的發展だけではなく、権力服従的な姿勢とともに、国家の思想的侍女として活動したと見ているのである。西田は、その座談会とは直接的関係しなかったとしても、西田の弟子たちが主になっている京都学派の戦争擁護への発言であった故に、西田への匕首になって突きつけられたといえるだろう。

### Ⅲ. 韓国における西田哲学の意義と課題

#### 1. 韓国における西田の意義

西田の哲学は、独創的な体系と論理をもっている哲学である故に、世界からも注目されつつあるし、韓国の研究においても、西田の哲学は世界的であると認められている。実に西洋からは、東洋哲学・思想が無視されてきた状況の中、西田という東洋の哲学者が、自分のもつ思想・哲学に論理という西洋的思考形式を付与して思索し続けたこと自体が世界的なことであるし、世界哲学史においても業績を成すことに繋がるだろう。こうした西田が世界への可能性を拓いたことは、同じ東洋の一員としての韓国にとっても、大変喜ばしいことであり、将来、韓国にも世界的哲学者が出てくることにも、期待の思いを抱かせてくれる。このように、西田と西田哲学の意義は、日本だけのものではないのである。韓国における西田研究は意味をもつことになるだろう。

ところで、西田は難解とされる哲学的論文以外にも、膨大な量の文章を残している。日記をはじめ、随想、漢詩、そして書簡など、西田の人間そのものが感じられる文章からは論文とは違うものが味わえる。西田の難解な論文が山のごとく研究へのきびしい挑戦の意志を与えてくれるものとする、西田の日記、書簡などは、海のごとく包容力豊かな姿で親しく迎えてくれるのである。西田の論文が西田の哲学的論理を語ってくれるとすると、西田の日記、書簡などは西田の実際の行動・実践としての生き方が西田の喜怒哀楽とともに、薫り高く伝わってくるのである。

さらに、筆者が西田に惹かれる理由の一つは、その多くの人々との心交える交流と、それにとまなう西田を中心とする人脈である。こうしたところは、西田の哲学の素晴らしさだけによるものではな

---

<sup>71</sup> 具見書『日本知識人の思想』（現代美学社、2001.10.）p.216.



いだろう。それは、彼の人好きの性格にもよるのではなかろうか。こうした西田には、情の深い、人好きの韓国人の情緒にとっては受けいれやすい、親しみを感じることになると思われる。

筆者は、こうしたことを思うと、韓国にもいち早く西田の哲学論文、そして日記、書簡などが翻訳され、発刊されることが待ち遠しい。韓国においての読者たちが西田の幅広い著作に接することができたら、きっと西田の魅力に惹かれるに違いないだろう。

## 2. 韓国における西田の今日的課題

今後の、韓国における本格的な西田研究を期待しながら、韓国における西田研究の今日的課題について考えてみることにする。

課題として、まず、「西田著作の翻訳・発刊」が急務であることが挙げられる。西田の全集はもちろんのことであり、日本哲学・日本思想に関する「文献の翻訳・発刊」も必要である。文献を通して日本哲学に接する機会が多くなれば、それにつれて、西田に対する、そして日本の哲学・思想に対する認識の転換とともに、学術的関心も高まってくるのは自然なことであると思われる。

二つ目は、より根本的な問題として、韓日両国のお互いの認識と意識の転換が挙げられる。無関心、偏見的視線と差別、優越感から脱皮して、お互いに対等な立場に立つ認識への転換が望ましい。

三つ目は、学問的方法と認識の問題である。まず、韓日両国は、学問を政治的關係などからはなれて、学問本来の純粋な立場から研究することが肝心であると思われる。そうしたとき、学問的歪曲性や偏狭性の問題も解決できるだろう。

四つ目は、西田の研究方式として、西田の哲学的内容に対する理解のためには、まず、西田の言葉のもつ意味から一つ一つ検討し研究していく着実な作業も必要であろう。西田の言葉は、たしかに難解であり、それをハングルだけの表記にした場合は、意味が正確に伝わらないかもしれない。しかし、韓国では現在はハングルが基調となっていることを考えると、少なくとも西田の言葉や概念についての正確な把握が必須であると思われる。

以上、韓国における西田研究、ひいては日本思想・哲学の受容、研究のための課題について、筆者が考えていることを述べてみた。西田に接する人は、西田哲学が難解である故に、壁を感じることもあるかもしれないが、その壁と課題を一つ一つ解決していくうちに、西田のもつ魅力も発見できるだろう。そして、将来、韓国における西田像は、現在とはかなり異なる方向へ展開していくに違いないだろう。韓国における西田受容の将来は、私たちの努力にもよるのであろうが、韓日両国の真の友情に繋ぐ明るい方向に向かっていると展望される。

## 結び

本稿においては、韓国での西田受容とその理解の様相を考察することを主な目的にした。本稿に取り組むなか筆者が確認できたのは、まず、韓国における西田がいかに理解されているかを語る以前

の問題として、まず、西田幾多郎と西田哲学は見知らぬ存在であることであった。

ところで、西田についての韓国の研究のなか目立つのは、やはり戦争と西田とを結びつけて理解するという傾向である。西田は戦争に哲学を提供したナショナリストであり、日本文化優越主義者という西田像が浮かび上がる。しかし、今後の韓国での西田受容の傾向性が、戦争と西田とを結びつけての理解に留まるとは思わない。韓国において著名な思想家である金芝河(キム・ジハ: 김지하)<sup>72</sup>は、「帝国主義哲学になるのは、思想的原液を歴史的にいかにかに活用するかの問題です。日本の場合がそうです。西田哲学のようなものが帝国主義の侵略のイデオロギーへ変質されたのは、哲学者自身の問題ではなく、政治家たちが利用したものでしょう」<sup>73</sup>と述べている。

韓国での西田研究の先駆けの許祐盛も現在とは異なる方面からの研究への意志を表明しているし、西田の哲学にある宗教性に注目する李賛洙のような見方も出ているのである。つまり、多方面からの研究を進めながら西田の全体像を理解していくに違いないだろう。

韓日両国の間に、真の友好を結んでいくためにも、互いの哲学・思想に関心を持ち、理解していくのが肝心なことであろう。そのためにも、韓国においては西田とその哲学・思想を、そして、日本思想を真に理解していくことが何よりも大事なことである。現実的には、両国の歴史的背景とともに乗り越えなければならない問題があるのも確かである。しかし将来は西田の全体像に、より近づいた研究が期待できると思われる。

**【重要韓国語参考文献】**：本稿では、韓国語の参考文献のみ挙げることにした。

- ・ 구건서 『일본 지식인의 사상』、현대미학사、2001.10. (具見書、『日本知識人の思想』、現代美学社)
- ・ 구건서 『일본 민족주의사』、논현、2004.8. (具見書、『日本民族主義史』、ノンヒョン)
- ・ 김성민 「박종홍과 니시다기타로의 헤겔변증법의 변용에 대한 비교연구」、성균관대학교、2004. (金成珉、「朴鐘鴻と西田幾多郎のヘーゲル弁証法の変容に対する比較研究」、成均館大校)
- ・ 김용덕 『日本近代史를 보는 눈』、지식산업사、서울대학교東洋史學講義叢書、1991.6. (金容徳、『日本近代史をみる目』、知識産業社、ソウル大校東洋史學講義叢書)
- ・ 김지하 「시인 김지하의 마지막 담론—21세기에 단국사상이 인류를 구원한다」 『신동아』、1992.2. (金芝河、「詩人金芝河の最後の談論—21世紀には壇君思想が人類を救済する」『新東亜』)
- ・ 니시다기타로·저、서석연·역 『善의 연구』、범우사、2001.4. (西田幾多郎·著、徐石演·訳、『善の研究』、ボンウ社)

<sup>72</sup>金芝河は、詩人、思想家。本名は金英一。1970年代に反体制文人の代表的人物。

<sup>73</sup> 「詩人金芝河の最後の談論—21世紀には壇君思想が人類を救済する」『新東亜』1992.2. p.464. 内容は、「わが民族に対する誇りをもつことはいいのですが、それがやりすぎてショービニズムだという批判も提起されることもあるのでしょうか」という質問に対しての答えであって、「ちょうど、ある人は私に対してショービニズムではないかと批判しました。(笑い)ところで、ショービニズムになり、帝国主義哲学になるというのは思想的原液を歴史的にいかにかに活用するかの問題です。日本の場合がそうです。西田哲学のようなものが帝国主義の侵略のイデオロギーへ

- 민경재 「한국 모노크롬회화의 양식적특성에 관한 연구 : 미니멀아트」, 홍익대학, 2003. (関キョンチェ 「韓国モノクロム絵画の様式的特性に関する研究 : ミニマルアート」, 弘益大学)
- 박규태 『상대와 절대로서의 일본』, 제이앤씨, 2005.9. (朴ギョテ 『相對と絶對としての日本』, 제이앤씨)
- 박영재, 박충석, 김용덕 『19세기 일본의 근대화』, 서울대학교출판부, 2003.3. (朴ヨン재, 박츄넝크, 金容德 『19世紀日本の近代化』, 서울대학교출판부)
- 서지영 「이우환의 작품에 나타난 『만남』 이론에 관한 연구」, 경기대학교, 2002. (徐智暎 「李禹煥の作品に現われた『出会い』理論に関する研究」, 京畿大学校)
- 송휘철 『당대비평』, 생각의 나무, 2000. 가을호. 제12호. (宋 フィチル 『当代批評』, 考えの木, 2000. 秋号. 第12号)
- 오문범 「불교의 空에 대한 케노시스 신학의 照明」, 한신대학교 신학·1996. (吳ムンボン 「仏教の空に対するケノシス神学の照明」, 韓神大学校神学)
- 윤상인·박규태 엮음 『일본의 발명과 근대』, 이산, 2006.7. (尹サンイン·朴ギョテ編 『日本の発明と近代』, 이산)
- 이찬수 「神、人間、그리고 , 空 : 칼 러너와 니시다니케이 지 비교연구」, 서강대학교, 1997. (李贊洙 「神、人間、そして、空 : カール・ラーナーと西谷啓治との比較研究」, 西江大学校)
- 이찬수 「근대일본의 두 얼굴-니시다철학 논평」 『불교평론』, 현대불교미디어센터, 2001. 봄호. 제6호. (李贊洙 「近代日本の二つの顔-西田哲学論評」 『仏教評論』, 現代仏教メディアセンター, 2001. 春号. 第六号)
- 최현민 「久松眞一の 禪思想」, 서강대학교 대학원, 1994. (崔ヒョン민 「久松眞一の禪思想」, 西江大学校大学院)
- 코사카쿠니쓰구·저, 심적·역 『절대무의 견성철학-니시다키타로의 사상』, 장경각, 2003.6. (小坂国繼·著, 深寂·訳 『絶対無の見性哲学-西田幾多郎の思想』, 藏経閣)
- 하타노신지 「이우환의 작품에 나타난 정신성에 관한 연구」, 경북대학교, 1994. (波多野慎二 「李禹煥の作品に現われた精神性に関する研究」, 慶北大学校)
- 한상일 『일본지식인과 한국』, 도서출판오름, 2000.8. (ハン・サンイル 『日本知識人と韓国』, 図書出版オルム)
- 허우성 「니시다철학의 비판적해명<A Critical Exposition of Nishida's Philosophy>」, 『철학과 현실』, 철학문화연구소, 1988. (許祐盛 「西田哲学の批判的解明<A Critical Exposition of Nishida's Philosophy>」, 『哲学と現実』, 哲学文化研究所)

---

變質されたのは哲學者自身の問題ではなく、政治家たちが利用したものでしょう」である。

- 허우성 「니시다철학의 베단타철학에 대한 비판」 『인도철학 제1권』, 인도철학회, 1989.1. (許祐盛「西田哲学のベダント哲学に対する批判」『インド哲学 第一』、インド哲学会)
- 허우성 「니시다철학의 양이적성격」, 『일본사상 제1호』, 한국일본사상사학회, 1993.3. (許祐盛「西田哲学の攘夷的性格」『日本思想第一号』、韓国日本思想史学会)
- 허우성 「니시다와 서양철학-시간관을 중심으로」, 『동양학 26호』, 단국대학교부설동양학연구소, 1996.10. (許祐盛「西田と西洋哲学-時間観を中心に」、『東洋学 26号』、壇国大学校付設東洋学研究所)
- 허우성 「진리는 현해탄을 건널수 없다-니시다철학을 중심으로」, 『철학과 현실 43호』, 철학문화연구소, 1999.12. (許祐盛「真理は玄海灘を渡れない-西田哲学を中心に」、『哲学と現実 43号』、哲学文化研究所)
- 허우성 『근대일본의 두 얼굴-니시다철학』, 문학과지성사, 2000.5. (許祐盛『近代日本の二つの顔-西田哲学』、文学と知性社)